



高原の風だより

2018(平成30)年6月 発行 <第13号>

満蒙開拓の史実を通じ未来平和を発信

～阿智村にある満蒙開拓平和記念館を見学～

NHK信州ふるさと通信人の取材で今年2月、南木曽町田立の可児力一郎さん(85歳)宅へおじゃました。可児さんは可児工芸の会長として今なお現役で息子さんたちと一緒にヒノキ箸を造っている。箸造りの苦労話を伺う中で、可児さんの満蒙開拓団としての想像を絶するような話も聞くことができた。

可児さんは小学3年の1941(昭和16)年、家族5人で読書開拓団として満州へ渡った。終戦間際の45

(昭和20)年にはソ連軍の侵攻に遭い、満蒙開拓平和記念館の前で記念撮影(私の隣、右から4人目が可児さん)開拓団は逃避行を余儀なくされた。その後、過酷な収容所生活を経て残留生活を送り58(昭和33)年に帰国し、現在の工場を立ち上げた。下伊那郡阿智村には全国で唯一の満蒙開拓に特化した満蒙開拓平和記念館があり、可児さんが提供した史料なども数多く展示されている。



戦争の悲惨さ、平和の尊さを語り継ぐ

木曽の地域づくりネットワークの視察研修で今年3月、可児さんにも同行していただき阿智村の満蒙開拓平和記念館を見学した。同記念館は民間運営で今年開館5周年を迎える「満蒙開拓の史実を通じて、戦争の悲惨さ、平和の尊さを語り継ぎ、未来の平和に向けて発信していくこと」を大きな目標として掲げている。木造瓦葺平屋の建物は約438m²で、展示室のほかセミナールーム、資料研究室、収蔵庫などがある。

「満蒙開拓平和記念館」のご案内

場 所: 〒395-0303 長野県下伊那郡阿智村駒場 711-10

開館時間: 午前9時30分～午後4時30分(入館は4時迄)

休館日: 休館日 毎週火曜日(祝日の場合は翌日)、毎月第2・4水曜日、年末年始等

入館料: 一般 500円(団体400円) ※団体20名以上

小中高生 300円(団体200円) ※団体20名以上

その他: 予約で展示ガイドをお願いしたり、語り部(満蒙開拓体験者)講話を聞いたりすることができる。

駐車場: 大型バス3台、普通車30台

電話&FAX: 0265-43-5580



～国策としての満蒙開拓移民事業～ 戦争の傷跡を風化させてはならない

読書村（現南木曾町）で 200 戸移民の分村計画

満蒙開拓移民事業は 1936（昭和 11）年に本格化し、満州（中国東北部）の総人口の 1 割を日本人で確保するために 20 年間で 100 万戸、500 万人を移民させ農村の治安維持や国境防衛などに当たらせる計画。1938（昭和 13）年、読書村（現南木曾町）でも 200 戸の村民を移民させる分村計画が決議された。



当時と変わらぬ中国東北部の広大な農地（1994 年）＜写真：可児さん提供＞

分村計画では「農家戸数に対し耕地が少ないため、満州へ移住する計画を積極的に進める必要がある。そうすることによって満州移民は広い土地で農業を行い、地元に残った人々も移民が残した土地を分配することで 1 戸当たりの耕地面積が増え農業の安定と経済再生につながる」ともくろんでいた。

満州への入植は「開拓」の名の下に行われたが実際には強制的な土地買収が行われ、現地の人々が代々耕作してきた土地を時価よりはるかに安く二束三文で買い上げていたという。

西筑摩郡（現木曾郡）では 1800 人が満州へ



1939（昭和 14）年から 45（昭和 20）年にかけて、日本国内では 22 万人という多くの人々が満州へ渡ったが、中でも長野県が一番多く 3 万 1 千人余りが渡満した。＜右図参照＞このうち郡内では読書・吾妻村（現南木曾町）を中心に 1800 人余りが夢を抱いて異国へ渡った。

田畠がなく配給米が頼りだった可児さん一家も役場からの強い勧誘などがあり 1941（昭和 16）年、可児さんが妻籠小学校 3 年の時に両親と弟、妹と家族 5 人で満州へ渡った。三留野駅から汽車に乗り名古屋経由で敦賀へ。そこから船で 3 日間かかった。

（写真：満蒙開拓平和記念館提供）満州では主に畑で大豆を栽培していた。読書開拓団は 6 つの集落に分かれ、それぞれ現地の人たちと共同生活をした。特に衛生面での悪さが際だっていた。

ソ連参戦により女性、子どもたちは逃避行と残留生活

1945（昭和 20）年 8 月 9 日、ソ連軍が参戦。開拓地では男子全員が現地召集で家族の元を離れ、残された女性や子どもたちは着の身、着のまま逃避行を余儀なくされた。起伏の激しい山道を日中は歩き、夜は野宿を重ねた。食べるものがなくヤマブドウのツルや葉を取って食べたこともあったという。ようやくたどり着いた避難所でも無情な大陸の冬が人々を襲った。冬の寒さと飢え、冬用の衣服もなく仲間は次々と死んでいった。避難所の周辺には亡くなった人を埋葬した盛り土が数多く並んだ。その後、集団埋葬する大きな穴を掘っても毎日運び出されるおびただしい数の死者で幾日も立たないうちに一杯になってしまった。冬は地面が凍結し死体を埋葬することもできず建物の裏側へ積み上げた。そのうちに担ぎ出す気力さえなくなり建物の中に屍が同



遺骨 4500 体が眠る方正日本人墓地（1994 年）＜写真：可児さん提供＞

居する状態に。すると今度は屍の衣服をはぎ取る中国人がやってきて、死体の山は裸の山と化した。夜はオオカミや犬が死体を食い散らかした。直視できない地獄がそこにはあった、と可児さんは述懐する。

24日間の逃避行の末、九死に一生を得て残留生活を送ることになった。この間に虐待を受けた人もいたが、同情を寄してくれる中国人も多かった。文化大革命の嵐の中で、獄中生活を強いられた人や生きて屈辱を受けるよりは、と広大な大地の土と化した人もいたが、生き延びるために中国人家庭に身を寄せ残留生活を送る人も多くいた。

夢にまで見た故郷へ帰国

可児さんは残留生活をする中で 1951（昭和 26）年3月、中国人の李栄さんのところへ大工として弟子入りをした。名前は李福（リーフー）。弟子入り後3年間は無給のはずであったが、「眞面目に働いているから」と給料をもらえた。弟子入りして1年足らずで新居を建てることもできた。

53（昭和 28）年3月に集団帰国の受付が始まり5月から集団帰国が開始された。未婚者や日本人同士の夫婦が帰国したが、農村部にいた多くの女性は中国人妻になっていたため帰国をあきらめた。可児さんも結婚について、中国人の娘さんを紹介され親しい関係にあったが、仲間が次々と帰国する中で望郷の念は高まるばかりで結局悩んだ末、同じ開拓民で鹿児島県出身の女性と結婚した。

58（昭和 33）年7月、17年間過ごした中国に別れを告げ、夢にまで見た故郷へ帰国。66（昭和 41）年には第一家が、67（昭和 42）年には妹一家がそれぞれ帰国した。

30数年の歳月の隔たり

念願の故郷へ帰国した残留孤児や婦人たちは、家族や故郷と空白の時間を埋めようと必死の努力をした。しかし、戦争によって離ればなれになっていた家族とは30数年の歳月が作り出した無情な隔たりがあった。言葉という大きな壁と高齢化社会の仲間入りをして苦しい老後を迎えていたという壁があった。そして、それらの理由で家族や身内に引き受けてもらえない孤児たちも多かった。

可児さんは 81（昭和 56）年8月、大工の技術を生かし副業だった木工芸を本業に切り換え可児工芸を立ち上げたが、多くの人はそう簡単に仕事は見つからなかった。

82（昭和 57）年9月、長野県から帰国希望者の調査のため訪中団が派遣された。また、翌年には、町助役のほか議会の社会文教委員会の議員3人、随行職員ら「未帰還者実態調査団」が中国方正へ派遣された。永住帰国する家族や一時帰国する人たちを決めて帰国し、吾妻、長坂地区に永住者用住宅7戸が建設されたほか、一時帰国者用宿舎として母子センターが用意された。

帰国者支援と平和活動

満蒙開拓団では読書開拓団だけでも女性と子ども 519 人が犠牲になった。また、無事日本へ帰国した人たちも今なお言葉をはじめ習慣の違いや生活面など様々な面で苦難に直面している。



帰国者住宅で森さん一家と談笑する可児さん（左から3人目・1994年）

（写真：可児さん提供）



お世話になった王さんの息子（右）
と42年ぶりに再会。（2000年）

（写真：可児さん提供）

可児さんは住宅の手配、仕事の確保、自動車の免許証取得の手伝いなど帰国した仲間に對してさまざまな支援を続けているが「自身が帰国時に味わった悔しい思いの二の舞はさせたくない」という強い思いがある。「私の戦後はまだ終わらない」と、帰国者の支援を続けるとともに阿智村にある満蒙開拓平和記念館の平和活動に協力する形で語り部なども務めたり、公民館など地域の人たちを記念館へ案内して講演会をしたり幅広い活動を行っている。

はりきりご長寿列伝

おおみち としこ
大道 利子さん (86歳・木曽町) ⑬

このコーナーは高齢にもかかわらず今なお元気に仕事をしている人、自分の趣味に専念している人など元気あふれるお年寄りを紹介しています。今回は木曽町開田高原の大道利子さんを紹介します。

お客さんの顔を見るのが楽しみ ~道路沿いのテントで野菜販売~

20歳で嫁いでから66年余り農業一筋で過ごしてきた大道利子さん。ご主人が健在の時には一緒に水稻や出荷用の白菜などを作っていたが、一人になった今は2反5畝余りの畠でトウモロコシや白菜、大根、ネギ、人参、ジャガイモなどを作っている。そのほか家のすぐそばのビニールハウスではナスやトマト、キュウリなども栽培。

「お客さんの顔を見るのがとても楽しみです」と話す利子さん。毎年、9月になると1か月余りトウモロコシや白菜など収穫した高原野菜を国道沿いの仮設テントで販売する。始めてからもう20年余り、観光客や釣り人、ゴルファーなど今では「おば

大道利子さん

んの顔を見たい」と訪れる常連客も増えた。お客さんにはいつも温かいコーヒーでおもてなしをしている。

野菜作りでは苦労も尽きない。「イノシシに荒らされてしまい切ない」と嘆く利子さん。昨年はトウモロコシが3分の1ほどやられてしまった。

利子さんは農業だけではなく何事に対しても前向き。71歳で老人大学へ入り2年間福島へ通った。卒業後、今度はさらに1年間シニア大学



トウモロコシの種まきに精を出す利子さん



利子さんと御嶽海関(昨年)

で学んだ。この時に入った短歌クラブには数年前まで入っていた。今でも気に入っている作品は「老いること考えずして新たなる光もとめて生きゆかむかな」。

毎日の忙しい農作業の中、利子さんが楽しみにしているのがテレビでの相撲観戦。相撲が始まると御嶽海関の勝敗に一喜一憂の日々が続く。大道家は御嶽海関のお父さんの実家に当たり、利子さんの子どもたちはいとこになる。

「久司が小学生の頃、夏休みにはいつも遊びに来ていた」と笑顔で話す利子さん。6月28日には子ども夫婦らと出羽の海部屋の宿舎がある犬山へ行き朝稽古を見学した後、御嶽海関と一緒にちゃんこを食べてきたという。「上に上ることは望まないが、ケガだけはしないように頑張って欲しい」と名古屋場所を前に熱いエールを送る。

私の本棚

DVD『山本慈昭「望郷の鐘」満蒙開拓団の落日』

(株式会社 現代ふろだくしょん)

昭和20年5月、満蒙開拓団の教師として満州へ渡り、8月9日にソ連軍の参戦で妻子を失い、自らもシベリア抑留を経て帰国。その後、中国に残された残留孤児や婦人らの救出に生涯をかけた故山本慈昭（長岳寺住職）の真実の物語。戦後70年を経て記憶が薄れつつある今、あらためて悲惨な満蒙開拓の現実を、映画を通じて知って欲しいと思う。



編集後記

満蒙開拓に関係する話題を新聞などでよく目にするようになった。今まで余り気に留めることもなく他人事のように思っていたが、可児さんの案内で阿智村の満蒙開拓平和記念館を訪れ、その歴史を知ってからとても気にかかるようになった。ごく普通の国民が戦争の被害者になり、加害者にもなってしまった満蒙開拓の歴史。多くの人々に目を向け関心を寄せてほしいと思う。



編集・発行者： 大目 富美雄 (おおめ ふみお)

〒397-0301 長野県木曽郡木曽町開田高原末川 5190 番地

電話& FAX 0264-42-3661

携帯 090-2526-7156

E-mail info@ome-fumio.com